
修学旅行は無人島!?

成瀬衣幌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

修学旅行は無人島！？

【Nコード】

N2444E

【作者名】

成瀬衣幌

【あらすじ】

高校三年生の京誅創（きょうしゅう）は、修学旅行で無人島に行くことに！！先生は島までは来ないことに…45人のクラスメイトと無人島へGO！

修学旅行は

プロローグ

修学旅行は

！？ プロローグ

私立緑川学園大学附属高校 創立180年の歴史があるこの学校で、前代未聞の修学旅行が始まるうとしていた…

- 2年I組・教室（在籍生徒数、1080人もいるから、クラスが増えてしょうがない。） -

僕の名前は京誅創（きやうしゅうそう）

今、一時限目がちょうど終わったところ。二時限目は、Special classroom activities（特別学級活動）何の授業何だろうか。まあ、大方修学旅行の目的地発表だろうな。そう。今は二年生の五月。修学旅行の季節なのだ（この学校では）

6分後。二時限目始まり。

「まあ、予想はついてると思うが、修学旅行の目的地発表だ」

すると、先生はプロジェクターを出し、プロジェクターにパソコンをコードでつなぐ。そしてスクリーンを用意して、プロジェクターの電源を入れる。何処かの島が映る。

「この島は、ながさきけんひらいわしみなみだい長崎県平岩市南平1193にある、よしみとつ吉見島だ。実を言うと、この島に行く。さらに実を言うと、無人島だ。先生たちも付いていくが、島までは来ない」

クラスの空気がどうかしている風になる。

さて、先生の詳細を教えてください。

名前は吉岡友和よしおかともかず

年齢は26歳と、若い。僕と9歳しか離れていない。

アウトドア好き、パソコンの知識と技術は人一倍、という（この学校の立派なホームページも先生が作ったものだ。）アウトドア系なのかインドア系なのかよく分からない人だ。

45人のクラスメイトと、これから無人島に行くのか…楽しみだ。祥子ちゃんしょうこと一緒に行くのも…（祥子ちゃんとは、創の恋人。相思相愛で、何故あの美人がルックス・平均、身長・平均、学力はともかく…の創と恋人になったのか不思議に思っているようだ。ただ、無人島に行けば分かるだろう。祥子ちゃんが創に惚れた理由が…）

f i n

修学旅行は

プロローグ（後書き）

この小説はフィクションです。

実際の地名・名称・団体とは関係ありません。

今回は行くのは当初は無人島とわかっていなかったなので、サブタイトルは修学旅行は になりました。

この学校の絵をブログ（<http://d.hatena.ne.jp/k411/>）にアップロードしますので、見てください。

紫色の、英語でmidorikawaと書いてあるビルが、緑川学園「midorikawa tower」です。

校舎は薄黄緑色の建物が第一校舎（創たちのクラスもこの校舎）、薄紫は第二校舎です。

第一章

修学旅行は無人島！？第一章 SCENE 1 旅行用意開始！

はあ…無人島なんて…。どうせなら、ハワイでもタチヒでも海外でも沖縄でも北海道でもいいからフツの修学旅行行きたかったんだけどな。（海外はフツーじゃないか）

まあ、これが運命。死ぬか生きるかなんて分からないし。

あつ、そうだ。吉見島のことネットで調べてみよう。まずは Wikipedia とか、あと省庁のサイトとか。長崎県の公式HPもいいな。平岩市についても調べなくては。

僕は、パソコンを立ち上げた。

windows xpの起動画面が表示された。

そして、お気に入りブラウザのMozilla Firefoxを起動する。

Googleのトップページが表示された。『吉見島 Wikipedia』でi'm Feeling Luckyを指定して、検索にかける。

…5秒後。Wikipediaのページが表示される。さつそく見てみると…面積：16.7平方キロ、人口ゼロ、簡単な歴史は、1789年、日本の長崎在住・町田万階まちだまんかいら率いる漁船で発見され、その後火山活動の影響で浮き沈みを繰り返すものの、最近は落ち着き、火山の活動もかなり弱まっている。1982年からは、1時間に一回起きていた火山活動もゼロ、日本政府も火山島の指令を外している。

なるほど。火山活動のせいだね。でも沈んだりしないのだろうか。「大丈夫だ。研究機関の調査によって沈まないことがわかってい

る。」

先生！勝手に人の心を読まないでください！

そして、この後もどんどん調べ続け、いよいよ用意に取り掛かった。

数十分後。持ち物チェックシートにチェックをしていき、いよいよ終わり。ご苦労様でした。

第一章 Scene 2

修学旅行は無入島！？ 第一章 SCENE 2 出発

修学旅行当日 午前10時22分 多摩国際空港 国内線旅客ターミナル

「スカイジャパンエアライン432便にご搭乗の方は、お急ぎください」

僕たちが乗る飛行機の出発時間が近づいている。

「よし、みんないくぞー！！！」

吉岡先生の声が響く。

僕は胸を高鳴らせながら、搭乗ゲートへと急ぐ。

5分後。

全員が乗り終わり、一安心。目の前にある^{リナックス}UNIXパソコンの電源を入れる。

起動した。早速ブラウザを起動する。このパソコンには^モMozilla Firefox 2が入っているようだ。もうすぐリリースされるMozilla Firefox 3 正式版が待ち遠しいなあと思った。

飛行機が離陸した。無事に離陸した。それにしても、この学校、金もってるなあ、と思った。

保護者には一人5000円しか募集していないから、5000x40x8で160000円。いや、大丈夫か。しかし、この便はチャーター機というか、貸切だ。相当な費用がかかったのでは、とも思った。ハクラス分あるからなあ。

「おい、京誅^{きやうしゆ}、見てみるよ、あれ。」

親友の、大屋^{おおや}賢治^{けんじ}が話しかけてきた。

「何だよ…ん、ああ、あれか。」

どうやら、大屋は窓の外について言っているようだ。しかし、僕は、安月給の父さんが、どこから金がやってきたのか知らないが、旅行するお金だけがなぜかたまっていた。それで、月一回は旅行に行っていた。（そのせいで、一回も皆勤賞を取れなかったが。）

だから、飛行機も何百回と乗っている。なので、窓の風景などは、最初はビックリしたけど、今は慣れてしまっている。

僕は、まだ大騒ぎしている大屋に、言った。

「おい、お前小学校からの親友だろ、だから、僕が飛行機乗るの慣れたるの知ってるだろ……」

「ああ、そういえばそうだったな、悪い悪い（わりいわりい）」

そう、僕と大屋は小学校からの親友だ。しかも、小学一年生から今まで、一回もクラスが別々になったことがない。さらに、中学一年生ごろ、知能指数が急激になぜか高まってきた僕は、難関で有名な緑川に、高校から入ることになった。そのとき、学習能力が普通だった大屋は、悲しんだが、猛勉強して、緑川に2位で入った。（首席は僕だ）しかも、難なく学校の授業についていられることから、すごいな、と思った。

他愛ない話をみんなとしている間に、もう、長崎についた。

長崎到着から初日

長崎の空港から、これまた貸切バスで長崎駅へ。バスの車体には、『長崎観光交通』と馬鹿でかく書かれた、よくこんなバス作ったなという、センスが疑われるバスだ。

ぼくたちは、休み時間に密かに決めた席順の通り、要領よく乗り込む。

そして、バスは軽快にエンジンをふかし、出発した。

23分後、13:09分。（時間はバスの時計で見た）長崎駅の前に着いた。ああ、でかいなあ。空港でも一瞬見たが、駅に書かれた『yokoso! nagasaki』の文字は、長崎に来た、という気分にさせてくれる。

そこから、JR九州：特急『blue-sky! nagasaki』に乗り、^{ちくさえき}轟差駅から、地方の路線^{ちく}轟能生線^{のう}に乗る。

：さつきまでは、ビルが立ち並んだのだが、この路線に乗ったとたんに田園風景が広がる。

「おい、森田、田園、って感じだな」

僕は、クラスメート以上友達ぐらいかな、の^{もりた ひなこ}森田雛子に話す。

「確かにね…。さつきまでは都会だったのに、田舎になってるわ。私たちが住む東京とは大違い」

森田は率直に感想を言う。森田はクラスの中で男子がつける『女子人気ランキング』で2位を獲得している。性格もおとなしく、優しい。まあ、僕は1位である、祥子のほうがいいけど、10人くらいは、森田を好きらしい。

話が逸れてしまった。そんな事は置いて、やっぱり日本人には田園風…おっと、もう降りる駅が近づいてきた。

降りた駅は、^{ださいみなと}太齋湊といった。また、それがボロボロの駅、無人駅だった。

その名の通り、駅の近くには『太齋湊』と呼ばれる港があった。今は使われていないらしいが、今回は特別に船を用意し、島へ向かうこととなった。

その船は、この港にいるのがおかしいぐらい立派な船で（まあ、立派な港で見たらちっぽけに感じるのだが）、1000人の人々を運べるという船だった。名前は、『MIDORIKAWA educational institution ship special』といった。って、『midorikawa educational institution』って、うちの学園の英称じゃないか！…船まで持っていたのか、うちの学校。

とりあえず男子と女子全員が乗り込み、出発。なんか静かやな、と思い、先生に聞くと「ああ、この船はモーターで動いているんだ。太陽電池システムも採用している。2003年に緑川学園製船工場にて作られ、2004年に登録された」ほーん。そんなシステムをねえ。

そんな話を話しているうちに、島に到着した。先生たちは吉見小島^{よしみ}に建物を作り、そこに滞在するようだ。僕たちはまずそこに行き、そこで詳細が話された。

「えっと、無人島には、テントがあるので、入り口にある番号札の数字を見て、自分の班の数字のテントに入ってください。グループは、先生たちのほうで決めてあります。先生^{先生}宿舍入り口の表で確認してください」

「では、解散！」

先生の発言が終わると、僕は先生宿舍前の表を確認した。えーと、僕はNO・6か。あ、祥子ちゃんもNO・6だ。森田も。大屋も。…先生、なんて都合がいい。ということは、NO・6のグループはこの四人で活動するのか。

僕たちは、一時的に本島から小島にかけられた橋を渡り、本島へ。僕ら、NO・6のテントの中に入る。すると、大屋がいた。

「あれ、他のメンバーはまだきてないのか？」

僕は大屋に聞いた。

「ああ、そうだ。遅いな、女子はやっぱ」

「そうだ、と答えが返ってきた。」

「じゃあ、壁に糸でぶら下がってるあの『正しく無人島生活していただくために』でも読むか」

「サンセー」

そして、僕ら二人は黙々と読み始めた。

以下、本文

1・持ち物の確認

テントの中に以下に記載するアイテムがあるかきちんと確認しましょう。ない場合は先生宿舎へおいでください。

1・非常用PHS（先生宿舎と海上保安庁のみにかかります）

2・薪、50本

3・非常食セット（五日、メンバー分）

4・災害時緊急ライトメンバー分

5・正しく動物を狩っていたくために教本

6・他のグループと協力していくために教本

7・Y A ! E N T E R T A I N M E N T のレベルの本全冊

…僕らはひとつだけないものがあることを確認し、その本を読むのを取りあえずやめた。

そんなとき、女子組が来た。

「遅い！なにしてんだよ！」

大屋が女子に対して言う。

「いや、女子はこれを持ってけて」

「あつ」

そう、なかった非常食セットだ。職員宿舎にとりに行こうと思ったのだが。

「あつ、ども」

「もう、誤解しないでよね」

ちよつと不機嫌気味の女子も参加させ、全員で（2）を読んだ。

今度は、心得が書いてある。その次は：どうでもいい本だと確認した僕らは、とりあえず本棚にしまっておいた。そう、このテントの中には、発電機と電球、本棚、布団がある。（あ、発電機は厳密に言えばテントの隣にある）本棚にはY A ! E N T E R T A I N M E N T や、教本が入れられていた。発電機は、一応低音だが、ブーンと唸っていた。電球は一個だがあまり暗くない。ワット数が高いようだ。布団は羽毛布団で、メンバー分あった。そういえば広いな、このテント。普通のテントの10倍ぐらい広そうだ。眠くなってきた僕は腕時計を確認する。A M 2 : 2 1 分：そりゃ眠いわけだ。そして僕はこういった。

「みんな、そろそろ寝ないか」

「賛成」

まるつきし疲れた声で全員が返答する。発電機のスイッチを切り、電球のスイッチもオフにしておく。そして、静かに寝息をたて、就寝。

二日目午前

翌日。午前六時。その日は晴れ渡ったいい日だった。

僕らは、次々と起床し始めた。あ、目覚まし時計が付いていたのか。時計のデジタル表示を見ると「AM 6:04」となっている。「はあ、顔って洗えるのかしら」

森田が言う。さすが女性らしき発言だ。

「ともかく、川を探すしかないな」

僕はそう森田に言い、次に「みんなで川探しに行くか」と述べた。「そうだな、それしかないな」

目の下に若干くまが出来ている大屋がそう言った。

「よし、バケツと空のペットボトルを持って出発だ」

「OK」

僕らは、眩しい日の光に目を狭めながら進んだ。ここには地図も何もない。方位磁針だけはあるけれど。ともかく、前に進んだ。なぜか他の班はまだいない。水の確保って重要なものにな。

20分位歩いただろうか。すると、川が流れていた。しかし、飲み水なのだろうか。あつ、そうだこんなときは、「森田！水が。水質検査チェッカーを」20メートルくらい後ろにいる森田に僕は叫んだ。森田は化学同好会に所属している。しかも専門分野は「水」なので、水質検査チェッカーくらい用意しているはずだった。

森田が走ってきた。手には水質検査チェッカーが。どうやら、このタイプはペン型で、上についている液晶が水色になると飲める水らしい。

早速水質をチェックすると、液晶は水色に。要するに、飲めるということだった。

「よし、飲めるらしいな。じゃあみんなバケツに入れるぞ。男子はバケツ、女子はペットボトルそれぞれ五本ずつくんでくれ。ペットボトルはそのエコバックにいれること。いいな」

「オツケー」

そして、水をくみ始める。2分ほどたっただろうか。水汲みが終わった僕らは、帰ることに。

帰り道 NO.8の班に会った僕らは、片手を挙手した。向こうも笑顔で挙手する。バスの運転士みたいに、挙手することが約束だった。向こうの班のリーダーらしき人が言った。「水はこの先あったか、あったら飲めそうか？」僕は短く「ああ」と答え、「じゃ」と言い、足早に進んでいった。

テントに着き、女子はバケツにくんだ水で顔を洗う。男子は別のバケツで歯磨きをする。こうなると、次の問題は「おなかすいた」である。朝食を食べなくてはいけないのだ。

「おい、朝食狩りに行かないとな」僕は言った。そうすると、大屋が「いや、あの川に魚がいたから、ちよつと極秘でとってきたけど、食べるか」といった。ナイス！大屋。僕は、その魚を焼くために火をおこした。結構大変な作業で、3回も失敗したが無事に火を起こせた。どうやら大屋が持ってきた魚は鮎らしく、調味料を持ってきた祥子の塩をかけると、鮎の塩焼きになって、美味しかった。結構な量捕まえていたので、残った4匹は昼食にすることにした。

そうして朝の支度を終わると、急にトイレに行きたくなってしまった。とはいっても、全員携帯トイレを持ってきたため、支障はなかったが、問題は”どこですか”ということだった。

男性陣はともかく女性陣の猛烈な議論の結果、結局近くの茂みの中であることになった。僕らはトイレを終え、テントに戻った。これでもう全て安心だ。今の時刻は7時52分。10時に一度先生宿舎に行かねばならないので、それまでは各自持ってきた本や携帯ゲーム機、ケータイ電話などで暇つぶしをしていた。もっとも、ケータイ電話で電話することや、i-modeなどにつなぐことは出来なかったが。とりあえず僕は持ってきた『陽気なギャングの日常と

襲撃』を読むことにした。

気が付くと、9時40分になっていた。僕はみんなに「おい、そろそろ行くぞ。先生宿舎」と呼びかけ。ゴロ寝状態のみんなを起き上がらせ、出発した。

先生宿舎では、問題なく無人島生活できているかどうかというのが話され、各班のリーダーが自分の班の状況を話すことになっていた。そのリーダー役は、僕が引き受けた。というか、押し付けられた。

ついに自分の班の順番が回ってきた。「えーと、僕らの班では特に問題はありません。朝食もトイレも水の確保も済ませました」

こんなのでいいのか？とメンバーに目配せすると、メンバーはとりあえずうなずいたようだった。先生が「分かりました。座っていいです」と発言したので、言葉通り僕は座った。

そんなこんなで午前中が終わった。次は午後だ。昼食も食べなくては…それでは、『二日目午後』に続く。

まさかの最終回

さて、まず大屋がとった鮎で昼食をとった。朝飯と同じメニューでもいいけるものだ。

それから、火をおこすために薪をとってきた。

「じゃあ、何かするか？」

「うん、そうだな」

「じゃーねー、みんなができるのがいい」

「あー、たしかに」

「そうだねえ…だれかオセロ持ってきてない？」

「残念、持ってきてない」

「おれも」

「私も…」

「あ、そうだ、じゃあ、石でオセロ作ろうぜ！」

「ナイスアイデア」

そんなこんなで海岸で石を拾い、棒でマスを書き、勝負！まずは大屋と森田がやることにした。

黒が大屋で白が森田になり、開始。

黒：「よし、じゃあここ！」

白：「じゃあ私はここにすると」

黒：「じゃあオレは」

白：「そしたらねえ」

と順番に進め、大屋が若干リードしている情勢に。

「よし、勝てる！」

「うーん、負けそう…」

でも、勝てると思った一瞬の油断が原因で、一気に森田逆転リード。
結局森田が勝ったのだった。

さて、

「小石オセロ」も終わり、暇になった。「よし、晩御飯も鮎だとアレだから、釣りにでもいこうか」

「ああ、そうだな」

それから、たのしいことはいっぱいあったのだが、なぜか時の流れが早かった。

「よし、もういいだろう。動作を止めてくれ」

校長が技術長に命令する。刹那、近くに鳴り響いていた機械的な音が止んだ。

と同時に、目の前にある大きな機械から人が出てきた。たくさん。みんな眠っているのか、死んでいるのか。目を瞑ったまま、外へ投げ出される。

「もうシミュレーションは完了した。途中からスーパーコンピュータFeat. 仮想体験マツスイーンの中の時の流れを早めたからな。さあ、次は本番といこうか」

この物語は、スパコンの中で現実の時間では12時間の間に行われていたことだった。

57日ほどシミュレーションを行い、それからさらに修学旅行を無人島にするか他の場所にするか決めるのだ。

ちなみに生徒たちの記憶は消える。そして朝目が覚めると自分のベッドの上にいるのだ。

そして、3日後の「Special Classroom Activities」。

「まあ、予想はついていると思うが、修学旅行の目的地発表だ」

すると、先生はプロジェクターを出し、プロジェクターにパソコンをコードでつなぐ。そしてスクリーンを用意して、プロジェクタ

「の電源を入れる。何処かの島が映る。」

「この島は、ながさきけんひらいわしみなみだいら
長崎県平岩市南平1193にある、よしみと吉見島だ。実を言
うと、この島に行く。さらに実を言うと、無人島だ。先生たちも付
いていくが、島までは来ない」

どうやら、生徒は本当に無人島へ行くらしい。

End .

まさかの最終回（後書き）

いきなりとんでもない展開で終わってしまったてすいません。
ちよつと本格的に書きたい小説があるもので。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2444e/>

修学旅行は無人島!?

2010年10月8日13時09分発行